

まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 40



道後温泉

特 地域の顔をつくる 集

『地域イメージの創出』

- 風にこだわる挑戦
- 「うみ やま こころ きらきら輝く」町づくり
- 人と自然で創る健康の村を目指して
- 瀬戸内海の楽園を目指して
- こころ豊かな生活と夢文化創造のまちづくり

情香薫る城下町創ろうまちの物語……(社)松山青年会議所理事長／石原 実……………1

特 『地域の顔をつくる』 集

—地域イメージの創出—

風にこだわる挑戦……………	肱川町／安川 武志……………	2
「うみ やま ころろ きらきら輝く」町づくり……………	三崎町／金森 一臣……………	4
人と自然で創る健康の村を目指して……………	美川村／高橋 房俊……………	6
瀬戸内海の楽園を目指して……………	岩城村／宮脇 馨……………	8
ころろ豊かな生活と夢文化創造のまちづくり……………	御荘町／藤村 雄二……………	10

論談—まちづくり—

地域政策の時代を生きる……………	財鉄の歴史村地域振興事業団専務理事／藤原 洋……………	12
------------------	-----------------------------	----

キラリ光るまち

二千年の歴史に未来を見つめて徐福とロマンの町づくり……………	佐賀県諸富町役場／吉村 重幸……………	14
--------------------------------	---------------------	----

ふれあい広場

リレーでちょっとーク（伊予三島市・宇和島市から）……………		16
-------------------------------	--	----

地域を生きる

まちづくりに新しい風を……………	松山市／三好 通昭……………	18
------------------	----------------	----

本物を求めて……………	大三島町／越智幸博・万里子……………	20
-------------	--------------------	----

研究員活動を振り返って……………

共済連／松岡 正範……………	22
----------------	----

肱川町／石家 清……………	24
---------------	----

Information

平成5年度地域づくり研究サロン……………	26
----------------------	----

まちづくり総合センター平成6年度事業計画……………	27
---------------------------	----

媛のくにフラッシュ……………	28
----------------	----

〈松山市・伊方町・東予市・生名村・全国まちづくり調査〉

特集 “地域の顔をつくる”
今号のテーマ

—地域イメージの創出—

まちづくりの本来の目的は、そこに住む人々が、まちに対する愛着や誇りをもち、地域の諸活動に主体的・積極的にいかかわるような地域社会を創造していくことと考えられます。

このような地域社会の創造のためには、どう地域のイメージを形にしていけるかが、現在、まちづくりの中で求められているのではないのでしょうか。

この地域イメージが形成される要因として、「生活や歴史文化」などが影響を与えるものの「自然環境・建造物」などのモノが影響を与えるもの、以上のような、まちの内部要因が考えられます。また、一方では、まちの外に住む人のまちに対する印象などの外部要因も看過できません。地域に住む人々が、まちを訪れる人に誇れるようなまちをつくっていくためには、明確なコンセプトに基づく、地域イメージをいかに創出していくかが重要と考えられます。

そこで過去二号にわたり「地域の顔をつくる」というメインテーマにより特集を組んでまいりましたが、今回は、まちづくりにおける「地域イメージ」ということにスポットを当てて、その方策を探ることにしました。

表紙の言葉

湯けむり道後とは、ちよつと過剰表現ですが、日本最古から白鷺が足を治したことが温泉の始まり。その後、神様から聖徳太子、歌人、文豪家俳人、著名人、歴代天皇方も、来湯にお見えになつたことなどは、誇りに思っています。

学生当時、東京にて、愛媛とは誰ともピンとこないが、松山の道後温泉と言えば、「ああ」とうなずいてくれた。道後温泉本館建設百周年。松山にいても、指折りしか入っていない。もったいない話。

柳原 あや子



道後温泉

情香薫る城下町 創るうまの物語

(社)松山青年会議所

理事長

石 原 実



私たち、松山青年会議所は昭和二十七年創立以来、『明るい豊かな社会を築きあげる』ために、様々な角度からその時代にあった運動を展開してきました。その原動力は、まぎれもなく諸先輩方の「まち」を想い、愛する心があったからだと確信しています。しかし、

現代社会も大きく変化をしている今、青年会議所そのものも変革を始めようとしています。

そうした状況の中で、もう一度原点に立ち戻り、本来の「まち」のあるべき姿、理想の姿を考えていくことが大切であると思います。

本年度、松山青年会議所は「FOR FUTURE KIDSー未来の子達のために」をテーマに、まちづくりに取り組んでいます。今、私たちは地域の子供たちに何がしてやれるのか。何を残してやれるのかを、考え行動していきたいと思っています。

さて、私たち松山青年会議所がまちづくりを進めていく上で、全ての活動の指針となる「まつやま2001構想」というものが、先輩方の努力により作られました。

この構想は、「松山首都圏構想」と「馥郁たる文化の里構想」のハードとソフトの両面から、まちづくりについて、その必要性や実施計画、運動展開の方法など分かりやすく詳細に説明がなされています。これは、私たち青年会議所のメ

ンバーが、いつの時代でも同じ目標に向かい、同じ視点に立って足並みを揃えるために非常に重要なものとなっています。

この構想の中でも、まちづくりを進めていく上で、特に重要な要素として、市民一人ひとりに、まちづくりに参画していくという意識を持つていただくことが大切であるといっています。このことについての取り組みとしては、十年前より、毎年「市民シンポジウム」を開催し、青年会議所の考え方（ビジョン等）を広く市民の方々に問いかけ、また、市民の方々と共に自分たちの住むまちを良くする為に議論を交したり、考える場をつくってきました。

そして、このようなシンポジウムを開催していく中で、特に近年、堀之内周辺の再開発への提言というものが浮上してきました。

それは、まつやまの顔であり、より所である松山城とその周辺（城下町）をどうしていくかについて行政サイドだけに頼ることなく私たちが真剣に考え、具体的に

取り組んでいこうとするものです。その一つとして、「光の城下町」という堀之内ライトアップ事業がスタートしました。これは、堀之内の存在を市民の方々にもう一度再認識してもらおうとするものです。

また、城下町を抱える全国各地の青年会議所のメンバーが、松山で一堂に会し、熱く「まち」を語り合う「第14回全国城下町シンポジウム松山大会」を、平成七年四月一日（土）～二日（日）に開催する予定であります。

本当に、まちづくりはエンドレスだと思っています。自分たちの住んでいる地域をどうすれば良いか、何ができるのかを考えていくと、様々な問題にぶつかり、そして新しい道が開けてきます。

我々は、二十歳～四十歳の青年として、既存の考え方にとらわれず夢を見続け、その実現に向かって、一步一步進んでいきたいと思っています。



風にこだわる挑戦

肱川町役場
安川 武志

特 地域の
顔をつくる 集

…地域イメージの
創出…

「風の町」肱川町の広報誌に、平成元年四月から平成六年一月までの五十八回にわたり、町長自らの執筆による「風信」が掲載された。

執筆を依頼したわけではなく、自らが「風おこし運動」の展開を

住民に訴える思い入れからである。

その一節に、『風動き、水動き、人の動きの中から文化が生まれる』。『風車

の風で、人は意欲で動き続ける』、『なぜ木に花がある、石に火がある、風に期待して不思議はない』、『風が吹けば木が動く、木が動けば根が動く、根が動けば地が動く』とある。

我が町の自然の風は決して強くはない。住民一人ひとりの心の中



に「元氣風を」「やる

かそうと、現在も、風おこし運動」を展開中である。

■自然・人・起業からの風おこし人口の減少、高齢化という町の

風の博物館

存続にもかかわる課題を前に、いま肱川町では次の時代への新しい試み（挑戦）が始まった。

それは「自然エネルギーを町の特性と位置付け、風を糸口にして技術・人材・情報を集積し、自然エネルギーを通して、地域振興を図り、社会的役割を確立するための「風の博物館」の完成である。

■博物館の機能

博物館は、単に物を展示して一般に公開するだけの施設ではなく、町の価値や魅力を再発見し、それを活かして育てる中核的役割を担う場として位置付けられており、風おこしセンター的役割も持っている。

その役割として、大きく次の四つの機能が挙げられる。

第一は、風を知り、学ぶ所としての機能である。風に関する資料情報の収集による風の専門館としての役割を担うこと。

第二は、人が集まる所としての

機能である。日常的な集まり、非日常的な集まりを通して、町の振興を考えるコミュニティ機能を持つこと。

第三は、新しい産業を創る起業化のための機能である。新しい事業を生み出す所として、付加価値の高い産業へ転換するための実験を行う場としての役割。

第四は、情報を発信する所としての機能である。町の持っている魅力や価値を町外に向けて情報発信する基地として、また、発信と同時に情報を集める場としても機能しなければならない。

■風を知る博物館

風は、空気を運び、水を運び、植物の種を運び、春夏秋冬の温度を運んでくれる。

おそらく、普段は、風はやっぱりなものだとか、自然現象の一つとして、感じたり考えたりすることしかないだろう。

しかし、よく考えてみると、風がこの地球の特殊な環境をつくり、風によって成り立っている生物の関係が分かってくる。



博物館は、別段に珍しい資料が展示してあったり、アッと驚く資料が展示してある訳ではない。

じっくりとパネルや映像、模型などを見て回ると、風と宇宙、風と生命、風とエネルギー、風と精神、風と生活といった風とのかかわりが分かってくるようになっていく。

例えば、普段は気付かないでいる我々の日常生活の中で、干す、乾かす、住む、遊ぶ等の生活体験を通して風とのかかわりを知ることが出来る。

地球環境云々、が叫ばれる今日、たくさんの子供たちが博物館を訪れ、次の時代の環境保全等について、興味や理解を示してくれたら、この博物館は活きてくるものと思っている。

■周辺整備からの発信

博物館を中心とした周辺は、心身のリフレッシュゾーンとして位置付けている。

歴史民族資料館、鹿鳴園（ケビン、ビクターハウス、全天候型テニスコート）、鹿野川園地、丸山

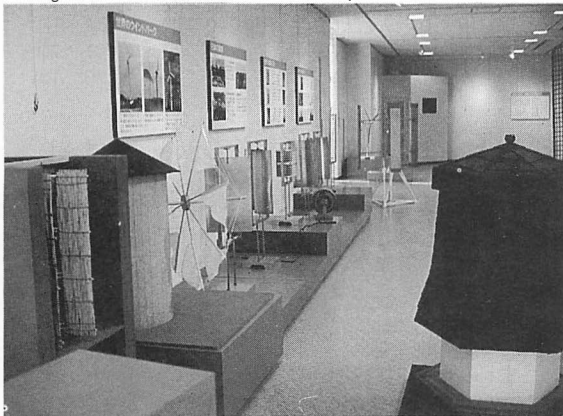
公園、自然散策の茶堂ルート、体験交流館「望湖荘」、高さ十三メートルのシンボル風車を中心とした風車村、子供たちのための変形自転車やソーラーカーで遊べる風のり広場等々、これら一連の整備は町内外の皆さんが自然を学び、体験することにより、心身のリフレッシュができる空間として、十分に活用していただけるものと確信している。

■風おこし運動のこれから

住民の「やる気おこし」「元氣おこし」をどう進めるかで始まったソフト運動からスタートとした「風おこし運動」

は、その延長として諸施設整備のハード事業に進展した。「新しい町創造」は、参加する、総合する、挑戦する、継続する、を計画のコンセプトに置いている。

人口が減る、若者が去る、農林業が駄目と嘆いてばかりでは活気のある町づくりは不可能である。



展示室

（世界各国の風車の模型などが展示してある）

住民一人ひとりが「それなら自分でもやれる」「自分もやってみよう」という内発的な行動がなければ、共有する町づくりは望めないであろう。

（財）愛媛県まちづくり総合センターへ派遣していた、当町の石家前研究員は「町づくりはどれだけ町に思い入れが持てるかだ」と言う。言い換えれば「どれだけ町のファンになれるか」ということである。

だとすれば、町の将来を思い、

今、何をしなければならぬかということを考えるのは、そこに住んで日々の暮らしをしている我々町民自身なのである。

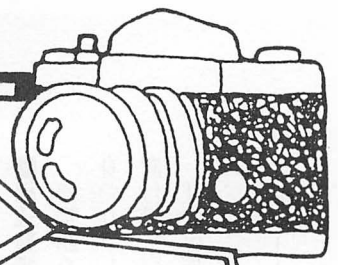
我が町の「風おこし運動」も原点に戻り、町のファンづくりに精を出さなくてはならない。

町のイメージ創出は、外から与えられるものではなく、そこに住む人々が創るものである。そして、行政が仕立たバスに乗るだけでなく、住民自らが運転するバスで目的地向かうことが望まれている。終わりに、町長の「風信」の一部を紹介する。

『風が歴史の頁をめくる』



風と遊ぶ「風のフォリー」

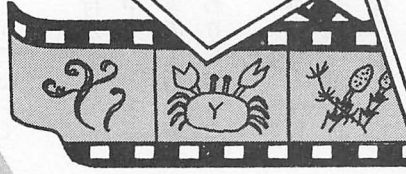


「うみ やま こころ きらきら輝く」町づくり

三崎町役場
金森 一臣

特 地域の
顔をつくる 県

…地域イメージの
創出…



愛媛県西部八幡浜市から西南部に約四十キロメートル、豊後水道に突出した佐田岬半島の先端に位置するまち、三崎町。面積は三十三・五七平方キロメートル、人口は四千八百六十七人（平成六年二

月末日現在）で、西端の佐田岬は瀬戸内海国立公園の一部でもあります。

また、佐田岬半島は三波川変成帯に属しており、中央構造線付近に多く産出する緑色片岩（青石）や黒色片岩で構成されています。

当町の基幹産業である柑橘栽培は、明治十九年導入の夏みかん栽培から百年以上の歴史を誇り、現在はトロピタオレンジと温州ミカンの交配種である「清見タンゴール」やポンカンの改良品種「媛ポリン」の栽培に力を入れています。

一方、海の方では近年飛躍的に漁獲量の伸びた太刀魚を中心に、ブリ・タイ・アジ・フグ・伊勢エ

ビや昔ながらの海士さんによる素

潜り漁での

アワビ、サ

ザエなどが

水揚げされています。

このように三崎町は、国立公園佐田岬や青石が形づくると異なる景観と海や山の豊かな産物に恵まれており、これらの資源を生か



しながら地域のイメージを創出し、まちの活性化に取り組んでいるところであります。

「うみ やま こころ きらきら三崎」。このキャッチフレーズに込められたものが、三崎町の町づくりのコンセプトでもあります。

では、このコンセプトに沿って今、三崎町での具体的な取り組みについてご紹介致します。

まず、「うみ」に関しては、豊かな海の幸を町内外の人々に味わって頂くために、佐田岬物産センター「三崎漁師物語り」を建設し、平成三年五月から営業をしております。

運営は三崎漁協が直営でやっており、初年度に二億八千万円の売り上げがあり、その後も名前が知れ渡るにつれて、売り上げも年々伸びています。

まさに、佐田岬半島の「グルメ

の殿堂」としての声価を不動のものにしています。

しかし、アワビについては近年水揚げ高が減少傾向にあり、他の魚種の種苗確保ということも併せて、平成六年度から「種苗セン



三崎漁師物語り

ター」の建設にも取り組み、資源管理型漁業を目指し、安定した漁家経営を図ることとしています。

漁業を目指す若者が増えていることでも、

当町の漁業活性化が着

実に進んでいることが伺えます。

「やま」の方へ目を転じると、「清見タンゴール」が一つひとつ袋に保護されて、まさに手塩にかけて育てられています。三崎町の柑橘農家の救世主として大いに期待さ



清見タンゴール

れ、味の面では日本一と折り紙もつけられています。観光協会が作成した名刺の台紙には、このみずみずしい清見タンゴールが刷り込まれています。そして、清見タンゴールと共に、二十一世紀へ向け、農家が夢を託しているのが「媛ボシ」です。これまでのボンカンの甘味と果汁の面をさらに改良し、導入されたもので、農業後継者の目の輝きも一層明るくなっているようです。

しかし、柑橘を取り巻く環境は米以上に厳しく予断を許さないと

ころですが、百年以上の柑橘栽培で蓄積された技術やノウハウによって、あらゆる困難や障害に打ち勝つことができると思われています。

“こころ”を代表するものに、岬の青石文化があります。特に

井野浦地区の防潮、防風石垣や正野地区にある高さ四メートル、長さ百メートルを

越す石垣などは目を見張るものがあり、名取地区の集落全体に見られる石積み・石垣・石畳は、石の美術館の様相さえ呈しているほどです。

これらの石垣などの大部分は、地域住民自らの手で百年、二百年、もしかしたらそれ以前からコツコツ積み上げられ、集落の歴史とともに続けられてきた行為からみても、地域の大切な財産として、もつ



と高い評価を受け、地域資源として活用されなければならないものだと思います。

そして、そういった思いを同じくする若者が集まり、三年前からこの青石と関わり合いながら、また地域の人々に青石文化について少しで

めてもらうために、青石資源マップの作成、青石積みの実習、青石写真展の開催や青石シンポジウムの開催などを通じて青石を見直し、先人に学びながら、三崎らしい景観を残すための活動を一步一步展開しています。

特に、平成五年十一月に開催された石シンポジウムでは、町外からの予想以上の反響に加え、町内の人々にも青石文化に対する再発見のきっかけづくりができたように思います。

しかしながら、何もかも順風満帆というわけではありません。“うみ”についていえば、海洋汚染や底引き網漁業等による乱獲で漁業資源の減少傾向にあります。“やま”についても、消費者の嗜好の変化や外国産との競争等、厳しい状況にあります。“こころ”についても、石の風景は刻々とコンクリートや新しい素材に取って代えられようとしています。

しかし、三崎がこれからも三崎らしくあるためには、地域資源である海の幸、山の幸、青石に込められた心を大切にしなければ三崎のアイデンティティの確立もなく、さらさら輝く三崎の活性化もないと考えています。

「うみ やま こころ きらきら三崎」。決して、ナウい言葉ではありませんが、素朴な三崎の人々が暖かい心づかいで地域を創造していくイメージとしてはぴったりと自信を持っていえます。



人と自然で 創る健康の村を 目指して

美川村役場
高橋 房俊

特地域の
顔をつくる **録**

…地域イメージの
創出…

愛媛県中予地区に位置する美川村は、総面積一三四・三八平方キロメートルに、二千八百七十三人（世帯数千百四十四戸）の住民が生活する山村地域です。

村の基幹産業は、農業や林業ですが、四国随一の規模を誇る『美

川スキー場』や、今から一万二千年前の縄文時代早期の『上黒岩岩陰遺跡』、四国八十八ヶ所四十五番札所『海岸山岩屋寺』などがあります。そして、村名のとおり美しい川の流れがある村です。

村では、地域イメージを創出し、村の活性化を図るため、行政と各種団体が一体となって様々な活動を推進しています。村民自身もつ村のイメージとしては、平成元年に実施したアンケートによると、約八割の村民が「自分たちの村は自然がきれいで安心して生活できる村」、「今後も住み続けたい」というイメージを持っているようです。



また、農業振興のためには、「農業後継者対策」を掲げる人が一位

で観光レクリエーション開発については、「自然景観を生かした観光レクリエーション開発」を望んでいます。

総じて、豊かな自然の中で生活

し、良好な個々の結び付きを求めながら安心して生活できる村づくりを望んでいると思われます。

平成二年に策定された村の基本構想も、こうしたアンケート等を基本に地域イメージを創出し、村づくりの方策を明らかにしたもので、『人と自然で創る健康の村』の実現を目指しています。

現在美川村では、

① 春に大川嶺で開催される『美川アドベンチャーフェスティバル』

② 夏に県指定名勝御三戸嶽付近で開催される『みかわ川まつり』

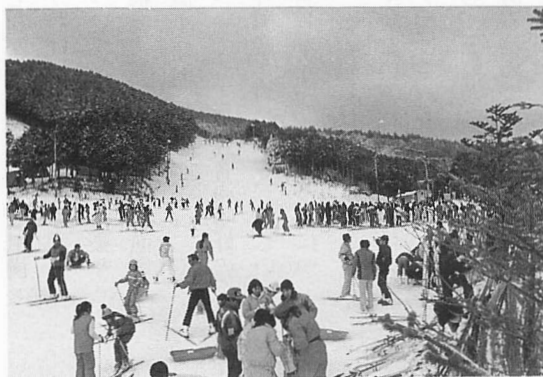
③ 秋の『みかわまつり』

④ 冬の『美川スキーカーニバル』

など、出来る限り村の自然条件を生かした、四季折々のイベントを開催し、村民はもとより村外の方々とも交流を行っており、年々美川村を訪れる人は、増加傾向にあります。

また、それぞれのイベントとともに、生活改善グループや婦人会、農業後継者を中心となり、「ふるさと市」を夏から秋にかけて実施しております。また、平成元年には、

美川スキー場



美川アドベンチャーフェスティバル

上黒岩陰遺跡を題材とした、美川縄文太鼓も村民の有志によって創作され、それぞれの団体が協力しながら村づくりを進めています。

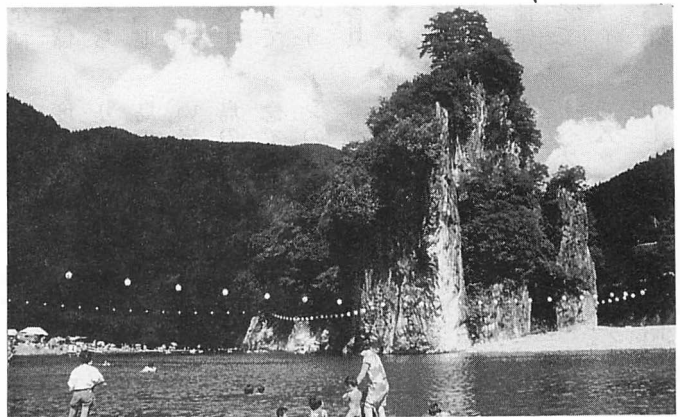
一方で、村外の方々がもつ美川村へのイメージとしては、昨年十一月にふるさと市の集大成ともいえる「美川フェア」を松山市の銀天街で実施しましたが、その時のアンケートによると、美川村で知っている施設として、美川スキー場、岩屋寺、上黒岩陰遺跡、大川嶺、御三戸河原などを挙げる人々が多く、スキーと美しい自然に恵まれている村として認識されているようです。また、村外の方々の希望としては、田舎の素朴な人情に触れる施設を希望し、新鮮で安心して消費できる野菜や果物の供給希望が多いことが伺われました。

また、全国の村名に「美」のつく村十村が提携し、全国へ向けてアピールして行くため平成元年から始まった「全国美しい村サミット」も、住民憲章やシンボルマークの制定、また、森林交付税創設

の要望、環境問題への対応など、美と自然に関するテーマで取り組んでおります。今回の冬季オリンピックの開催は、長野県に決定していますが、この招致活動にもサミットを縁に十村が協力しました。今では「全国美しい村郵便局長サミット」も開催されています。今後とも、共通した課題を持つ十村が協力して、交流が広がり、さらに全国に村の良さをアピールすることができればと思っています。

村民自身の村へのイメージも、村外の方々の当村へのイメージも方向としては基本的に整合性があり、今後は、より明確なものとして、実現して行かなければなりません。

人間の社会生活の原点である「村」も今では数少なくなってきましたが、今後は、時代とともに変化しながらも、数少なくなった本物の自然を守り、暖かい人情、人と人のかかわりを大切に、本当にここに住む人々が肉体



村のシンボル 御三戸嶽
みみどだけ

的にも精神的にも健康で、『人と自然で創る健康の村』を実感できる村、生活基盤が整備される中でも、失われた『村』（地域社会）の良さに触れ合うことが出来る村として発展再生することと確信しています。

全国美しい村住民憲章



わたくしたち全国10ヶ村の美しい村の住民は、その名のこころを澄みさした空、緑と清流、透明な湖に代表される美しい自然環境にはぐくまれ、古い歴史をもち文化を創造してきました。美しい村が互いに友好と親善の絆をさらに強め、真の豊かさこそ平和を実感できる村づくりをめざし、ここに憲章を定めます。

一、互いに美しい自然を守り、

住みよい村をつくりましょう。

一、互いに協力し、活力ある村をつくりましょう。

一、互いに心のふれあいをたいせつにし、

平和な村をつくりましょう。

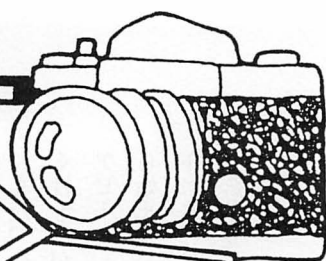
一、互いに学び、豊かな村をつくりましょう。

一、互いに交流を深め、新しい文化を創造しましょう。

平成3年8月18日



全国美しい村友好提携村
岡山県 美甘村
徳島県 美郷村
茨城県 美浦村
茨城県 美和村
長野県 美麻村
岐阜県 美並村
三重県 美里村
三重県 美杉村
和歌山県 美山村
愛媛県 美川村



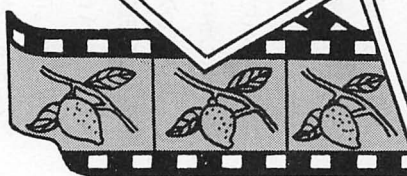
瀬戸内海の 楽園を目指して

岩城村産業課

宮脇 馨

特 地域の
顔をつくる **課**

…地域イメージの
創出…



■レモン！Lemon！檸檬！

「青いレモンの島」なんという心地良い響きだろう！このキャッチコピーからは誰もが青い空と海に囲まれ、陽光が燦々と降り注ぐ夢の楽園を思い浮かべることができる。



の人たちみんながこれにかかわって、飯の種にでもなればしめたものだと考えているだけなのです。もっとも、イメージなどというものは外から来

てやろうという

そのレモンを冒頭のようなコピーのもとに売り出して、ひと儲けしてしまおうというのが私たちの企みなのです。もちろん、「地域イメージの創出」などとカッコイイものであろう筈がないのです。

「レモン」という言葉だけでも梶井基次郎や高村高太郎などが描いた世界のように、素敵な感覚に包まれたエキゾチックな空間を連想するのではないでしょうか。また、数多くの歌にも甘くて酸っぱい「初恋の味」として登場しています。というわけで、売上げや消費量の延びに関係なく、国民的にもかなり好感を持たれている果物だと思っています。

る者が勝手に自分の都合のいいように解釈して吹聴するものですから、私たちがそれほど深く関与できようはずもないのですが……。

■なんとか目立ちたい……

ここに岩城村あり！

こんなことを考えるようになった元々の発端はささいなこと(?)でした。かつて、東京に在住していた当町の役場の課長が知人から「岩城村は地図にも載っていない」と言われ、「もつとこの島の知名度を上げたい」と考えたのが始まりでした。瀬戸内海にまたある島の中で、これといった特徴のない岩城島ですが、地図になんとか島の名前を載せたいという強い一念でたどり着いたのが「青いレモンの島」でした。

瀬戸内海の空と海の青さに、もぎたての新鮮なレモンのイメージを重ねて生れたのがこのキャッチフレーズです。バブル崩壊前の右肩上がりの経済に加え、ポストハーベットの問題がにわかにクロージアアップされ始め、タイミングは申し分のない時期(昭和五十七年

七月商標登録出願)でした。

■目立ち始めて……

「青いレモンの島」誕生の素地として岩城村の基幹産業となっていた柑橘農業と、愛媛県果樹試験場岩城分場の指導的存在がありました。特にレモン導入のキーマンとなった脇義富分場長は、的確な社会情勢分析に基づき、農産物の需給動向の中で低・無農薬、有機栽培への流れを読み、その対策としてのレモンの栽培を強く提唱されたのです。

しかし、立派なコピーは出来たものの、肝心の生産流通体制はなかなか思い通りには進展しませんでした。そこには、これまでの経過から役所や農協に対する根強い不信任感があり、そう簡単には払拭されなかったようです。

事前段階として、昭和五十五年頃から本格的な生産体制の整備に取りかかり、村独自のレモンの融資制度を設けたり(昭和五十六年)、苗木の調達・配付などに取り組み進んできました

また、昭和六十年六月に第三セ

クター方式で「株式会社いわぎ物産センター」を設立し、九月には特別島民制度「青いレモンの島友の会」を発足させ、流通体制の確立にも取り組み始めました。さらにマスコミ等の取材も増え、念願の知名度は順調に上昇しました。

■順風満帆から……事態急変！

ところが、ここに来てまた新たな問題が浮上する訳です。急速な高齢化、過疎化がそれです。全国的な傾向とはいえ、ふと気が付くと、六十歳以下の農業従事者はほとんどいなくなっていました。いくら基盤整備を計画的に推進しても、道路ができるその側から樹園地の荒廃が進んでいくという悲惨な状況がそこら中に広がっています。

さらに、追い打ちをかけるようにバブルが崩壊し、高級品嗜好が急減し、輸入フライトレモンによりポストハーベットの有利性もなくなり、一部には青いレモン(？)まで出てきました。流通体制でも他産地の産直等による消費者直結などが広く深く浸透し始めたのです。

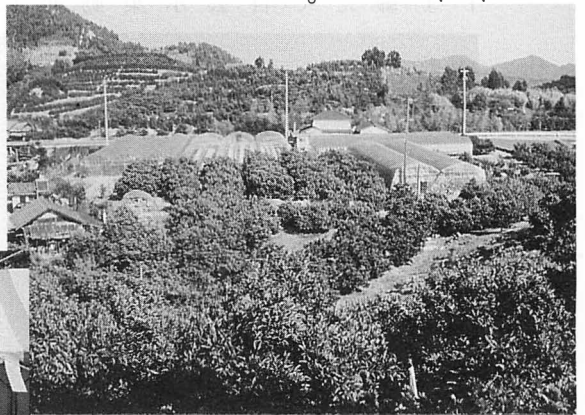
■10年先を見つめて……

このような環境の変化の中で、「安定生産体制を確保しようと、高齢者にも可能なレモンづくりやハウスレモンの技術革新にむけて支援方法を模索しています。そして、失われていく農の原点に立ち帰り、安全で適正価格の美味しいものを作る喜びを消費者と共に享受できたら……。

ということで、流通も(株)いわぎ物産センターを中心に消費者との結び付きをより強める方向へと転換し、安定した販売網を確立したいと考えています。また、PR用としても新たなパンフレットを作成したところです。この他にも「青いレモンの島」をイメージしたマスコット&愛称の募集もしています。

さらに、加工品開発も従来のレモンジャムだけでなく、待望の新品製「レモンハート」(ペースト状製品)の開発に取り組んでおり、新たな加工場の建設も計画しています。

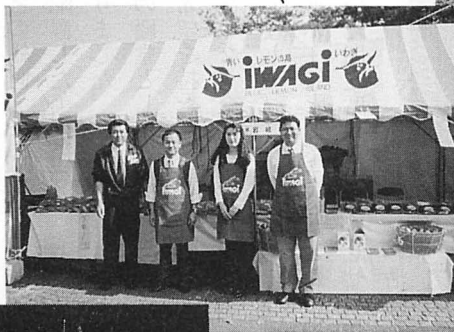
こうした産業としての取り組み



レモンハウス

認識し、良いところをいかに活用し悪いところをどう変えていくかを考え、新たなライフスタイルへの変革の足がかりとしたいのです。まだまだ、日暮れて道遠し」の現状ですが、これからもマイペースで自分たちの心の中に「青いレモン」の心を育て、いつの日か、みんなで地中海へ行けるよう夢見ているのです……。

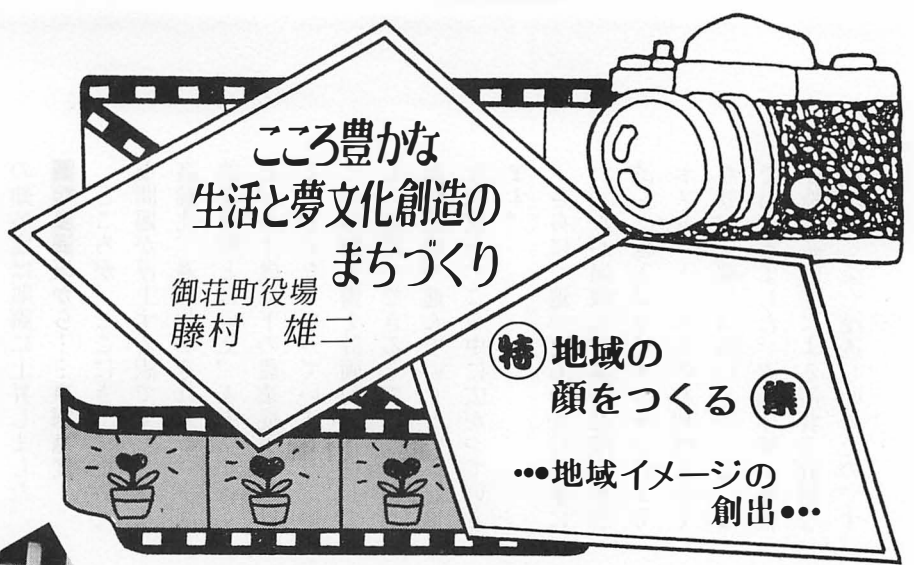
(私の予想だと、そのうちにきっとこの島が地中海のような素敵な雰囲気になったりはするのですが……。誰ですか？そしたら地中海に行く必要がない、などといっているのは……。)



販売促進
東京代々木にて



納涼船「青いレモンの島」号



平成二・三年度で

文化センター

五年度に夢創造館を

建設！

御荘町は、太陽の光をいっぱい
にうけてきらめく紺碧の海と心地
良い潮風、シラサギや鴨などの野
鳥が群れ遊ぶ川、みずみずしくま
ばゆいばかりの緑の山々があり、
感動に満ちた足摺宇和海国立公園
のほぼ中央に位置しています。

■御荘町文化センターを建設

町は、県都松山市から車で約三
時間三〇分、市のなかで一番近い
宇和島市からでも車で約一時間か
かるなど、都市から遠いという地
理的ハンディキャップから、芸術
文化に触れる機会が少ない状況に
ありました。また、子供からお年
寄りの方まで対象とした文化活動

や芸術活動の集

会・発表や展示

会・講習会

など、多目

的に利用で

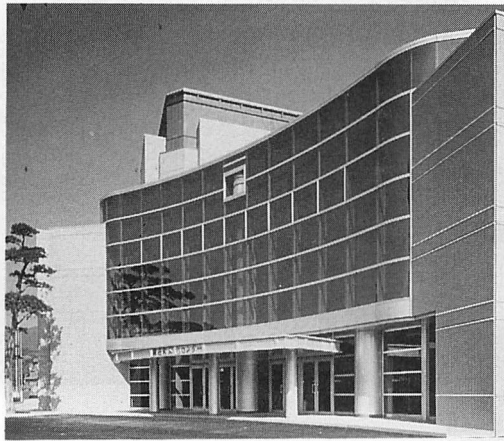
きる施設がなかった

ことから、平成二年度に御

荘町文化センター建設工事が始ま

り、平成三年十月に完成、同年十

一月九日にオープンしました。



私たちの長年の念願でありまし
た文化センターは、中川一政氏の
「薔薇」、流政之氏の「武者ぶるい」、
清水九兵衛氏の「朱甲冠」、藤部
吉人氏の「響」などの絵画・モニュ
メント・彫刻を配置した美術館の
ような建物になりました。私たち
の誇りある文化の殿堂として、ま
た、若者に夢と希望を持たらし、
みんなの心と心をつなぐ交流の場
としてスタートしました。

御荘町文化センター

のホールでは、ベルリン・フィル
木管五重奏団などのコンサートや
劇団による演劇、文化講習会など
を催しています。また、文化グルー
プが活動成果を披露、発表するな
ど、数多くの行事が予想以上に、
しかも手づくりで行われています。

このような文化センターでの事
業を喫機に、コンサートなどの企
画立案、運営を行う会員数一〇〇
名の『御荘町夢文化コンサート』
と新しい組織も結成され「僧都川
せせらぎコンサート」などの新し
い活動も芽生えてまいりました。

アーチストの方から「演奏して
みたくなるような素晴らしいホー
ルですね」と好評を博している文
化センター。子供からお年寄りま
でが楽しく参加でき、心と心のふ
れあい・温もりのある施設にと文
化センターのスタッフ一同努力し
ています。

■御荘町夢創造館の建設

このような状況の中で、今後は
こうした芸術文化をどう学習し、
地域に根づかせ、創造していくか

夢創造館



く事業や、芸術文化の創作活動を行うとともに、グローバルな視野を持つ人材を育成する場として有効に活用していきたいと思っております。また、建物の周囲は、足摺宇和海国立公園を背景に、憩いと散策のスペースとして芝と樹木の広場とし、子供たちが制作した石の彫刻を配置するなど、施設自体や周辺空間が芸術文化の創造にふさわしいものとなりました。一人でも多くの人に感動を与え、こころ豊かな人づくりを目指していく活動を展開し、個性豊かで魅力あ

という、ソフト面の整備が必要になってきました。そこで、「人づくりは子供たちから」をコンセプトに、豊かな夢と創造性を育み、多くの人たちとのふれあいのなかから生きた芸術文化を学習していく施設として「夢創造館」の建築に取り組むことになりました。

傾斜四五度、ピラミッド型の八角錐の夢創造館は、平成六年四月一日にオープン。単にものづくりの施設にするのではなく、交流事業によって、子供たちの興味を引



夢創造館ホール

せせらぎコンサート



ふれるまちづくり・地域づくりを推進していきたいと考えています。

■これからの正念場

町は、文化センターと「夢創造館」を建設しましたが、決して近代的な都市化整備を目指したのではなく、美しいふるさと、心のふるさとづくりを目指したものです。

この館で、交流事業を図り、また、あらゆる芸術文化にふれることで感性を高め、こころ豊かな人づくりから、美しいまちづくりへの気運が高まり、自然と調和した

生活環境づくり・文化の香るまちづくりを展開していく、活力と潤いのあるまちづくりを目指していきます。また、ふるさとの風景・自然・生活・文化を楽しめる心の豊かな人づくりを行わなければ美しいふるさと、やすらぎのある心のふるさとづくりは完成しないと思っております。



ハイドン・フィルハーモニー管弦楽団

地域政策の時代を生きる

財団法人

鉄の歴史村地域振興事業団

専務理事

藤原

洋

一・地域政策の時代

「地方の時代」という言葉は、当時地方に住む人達にとって非常に勇気を与えた言葉であった。

しかしこの時代には、中央政府の地方行政への関心を高めることはできたが、肝心の地方行政の積極的な対応は極めて少なかった。

つまり、政府の地方行政への支援の高まりに期待し、やがて地方の時代が来るであろうといった期待感だけに終わったといっても過言ではない。

そして地方の人口は、ますます流出し、皮肉にも一極集中化が進行する中で「都市の時代」を迎え、地方の活力は低下していった。

このような危機感から、地域に

おいては新しいリーダー達の手に

よる「地域づくり」への取り組みが始まり、その自助努力によって活力を回復した地域も現れてきた。

ここにきて「地方分権」とか「規制緩和」といった地域にとって非常に好ましい方向が打ち出されてきた。これは、地方自らが、政策をもつて、地方行政を遂行していく為の環境が生れてきたということである。

地方は、このチャンスを今度こそ有効に生かしていかなければならない。しかし、ここで問題となってくるのが、地方における政策立案能力であり、これを実行していく行政能力である。

二・総合政策の必要性

これまで、様々な政策決定に政治や経済を優先させることが多く、ここにきていろいろな歪みをつくつてきている。それは人間社会の中には、それぞれの生活の中で育まれてきた文化の存在があるからである。

高度化し複雑化している現代社会において、人口問題、環境問題、都市問題、地域問題といった、様々な政策課題を抱えている。これまでは、政治学か経済学そして法学などを基盤とした「政策科学」の手によってこれらに対応してきた。しかし今後ますます多様化していく地域社会にあつて、これに対応していく為には、人々の生活の中に根づいている「文化」への理解が必要となってくる。

そこで、

風俗や習慣、宗教や芸術、そして現代の生活様式等も視野に



入れた「文化科学」の存在が重要となってくる。つまり、「地域研究」やその文化について検討する「比較文化」、そして政策課題を文化の問題としてとらえようとする「政策文化」等の観点から、政策を考えていこうとする方向の必要性である。

そして、何よりもこの「政策科学」と「文化科学」との総合性が必要であり、これは、政策と文化の融合によって新しい政策的価値を創り出していく行為である。そして情報の収集や、交流活動によって具体的な企画や行動を展開していくことが重要である。

三・地域文化の持つ意味

地域には、その自然条件から生れた産業があり、そこで生活していく為の知恵がある。このような地域の歴史は、集積されて固有の文化を形成していた。その技術の歴史や産業の歴史は、地域の土地のもつ力を人間社会にとって、有用なものを引き出してきた歴史でも

ある。したがって、地域における歴史や文化の存在は、これを正しく理解することによって知恵の源とすることができる。

これを具体的に考えていく場合、地域の博物館である。地域の固有の産業の歴史や文化の歴史を正しく保存し、正しく公開していく博物館事業は、ここで行われる学術研究事業によって「土地の持つ力」を発見し、その価値を高めていく活動の場となるからである。

この様に、地域のもつ歴史や文化の誇りを過去に向って見るのではなく、未来に向ってどう機能させていくかといった方向から考えていくことが大切である。つまり、現代的意味を追求していく事こそ、地域の持つ力を活用した計画づくりであり、文化を通して考えていく政策づくりへと発展していくことになる。

四・地域産業政策を考える

バブル経済の崩壊によって企業実績が著しく低迷すると共に、失業者が増加し、新卒者の求人も大幅に落ちこんできている。した

がって都市における雇用能力も、人口を支える求心力も低下してきていると言ふことができる。

現在、日本の経済秩序が模索されている時であり、今の不況もこれを日本経済の実力の力として見ておく方が正しい見方だと思える。

都市の雇用能力の低下は、地方での人材確保に好影響を与える現象であるが、ここで重要な事は地方にその受け皿があるかということである。

地域の産業が雇用を支えていく為には、第一に地場産業の活性化であり、第二には、若者が求める職種の開発である。その為には、中小企業の活性化対策、伝統産業の振興、第一次産業のボーダレス化による新事業開発、地域の土地の力を生かした文化産業や、知的産業の開発、そしてグリーンツーリズムの様な交流サービス事業等の事業展開が考えられる。ここでも文化の視点をもった、地域産業政策のレベルが問われることになる。

五・地域間交流の新しい視点

余暇時代を迎え「余暇の時代をいかに生きるか」といった新しいライフスタイルが求められている。前日経連の会長であった鈴木永二氏は、次の様に述べている。「日本人の多くは、レジャーという言葉の意味を誤って解釈している。それは本来自由時間のことであり、思索の為に費す哲学的時間をいうのである」つまり余暇時間は、未来につなげていく生産的時間として活用していくことが重要であり、このことは交流を柱とした地域政策に対して重要な意味をもっている。

これからの交流事業や地域の観光事業を考える時、来訪者が自身を高めていくことのできる旅を求めていることを自覚し、旅をすることによって知的好奇心をも満足できる様な交流活動を推進していく必要がある。

例えば、イギリスのテルフォード市にある「コールブルックデール。一大鉄産業を誇ったこの地は、産業革命とともに衰退していったが、製鉄産業の歴史を保存しよう

と始められた調査活動や保存事業は「産業考古学」といった学問を生み出した。現在では、大学の専門コースが設けられ、この近代の歴史の解明と保存活動の功績によって、今では外貨獲得四番目の観光地となっているほどである。

技術史・思想史学者の飯田賢一氏は、この様な活動の発展的な考え方を「レジャー施設と歴史、文化遺産、記念物の共存は可能であり、共有することで質の高い観光地として利用できる」と述べている。また中沢新一氏は「神話や民話は土地と共に語られるものであり、その土地にたつて初めてその意味がわかり、おそれさえも感じる」と述べている。

その土地のもっている「場」が来訪者の五感から情報を伝えようとしているのである。この様な「知的観光地」は、その土地の地霊ともいえる力を生かし、新しい展開をもたらすことになる。

ここでも文化政策のレベルが問われることになる。

二千年の歴史に
未来を見つめて

徐福とロマンの
町づくり
佐賀県諸富町役場

吉村 重幸

阿蘇外輪山に源を発した一滴の水は、集まり合って流れを作り、やがて筑後川となつて有明海を目指す百四十三kmの旅に出る。

この九州一の大河「筑後川」の河口に開けた町が諸富町である。

佐賀県の東南部に位置し、東は筑後川を隔てて福岡県の大川市と隣接する人口一万二千六百人、総面積一二・〇二km²の小さな町である。有明海の沖積層からなる豊かな土壌は県下でも有数の穀倉地帯として、かつて佐賀県が米作り日本一であったころの中核的産地を成し、また、海上流通の拠点として港町の賑わいを見せていた所で

もあった。

米麦を中心とする農業と有明海の海苔養殖漁業が支えていた町の産業も、昭和三十年に筑後川の諸富橋と大川橋の開通により、大川市の伝統的産業である家具製造工場が町内に進出し、今では関連工場を含めて七十社余りが操業する家具の産地となり、以前からあった味の素九州工場と併せて製造の町へと変貌を遂げている。

皆さんは徐福じよふくと言う人物をご存じであろうか。

時は二千三百年前に遡る。そのころの日本は縄文時代から弥生時代への過渡期を迎えていた頃であるが、大陸では大変動の時代であった。春秋戦国時代が終わり、

秦の始皇帝が初めて中国を統一し、巨大な帝国を創り上げた。

始皇帝は、無類の権力を背景に栄耀豪華を尽くしていたものの、やがて訪れる老いと死に恐れおの

のき、全土に「不老不死の霊薬を探し求めるよう」命を発した。このころ齊の国の方士（神仙の道術



者」であった徐福は、蓬萊の国（日本）に仙薬があると始皇帝に奏上し、大いに喜んだ始皇帝は童男童女三千人と百工（技術者）

五穀の種を徐福に与え仙薬を求めさせたものの、徐福は平原広沢を得て王となり帰らなかった。

このことは、中国の正史で、高い信憑性を持つ司馬遷の書いた『史記』に記述されている。

前置きが長くなったが、わが町には、古くからこの徐福船団が上陸をしたと言う説が、語り継がれており、その遺構と言われる場所も存在している。そして、この事実とも伝説ともつかない徐福物語こそが、町づくりに大きなインパクトを与えたのである。

平成元年、

『ふるさと創生事業』

が発表された時、若手職員二二名で構成する『ふるさと



創生検討委員会」は、行政職員や住民からの数ある提言の中から徐福伝説を取り上げた。この渡来集団の勇氣とロマン、それに加えて稲作や金属、建設、医療等の高い技術文明をもった当時のハイテク集団が、九州に住みつき、集落を形成し農耕を始めたことは、弥生の日本に衝撃的な文化革命をもたらしたのである。

これこそが正に「ふるさと」の原点であると位置づけ、徐福上陸の地であるこの町から『地球村ふるさと宣言』を全国に向けて発信することとした。

『地球村ふるさと宣言』

一、ふるさとのぬくもりを大切に
おもいやりの心を育てよう。

一、ふるさとの自然や歴史や文化を大切に未来へ確かに伝えよう。

一、ふるさとを知り、誇りに思
心を育て国際社会を築くも
たになろう。

町づくり事業の展開はこのふる

さと宣言に始まり、全国の小学生

から募集した各地のふるさとの絵を陶板にして、佐賀環状自転車道（総延長四十四km、諸富町内は三kmで徐福サイクルロードと命名された。）沿線に永久的に展示し未来に残す「全国ふるさとちびっこギャラリー整備工事」を完成。平成三年八月には「全国ふるさとの絵」コンクール入選者とその家族を、北は北海道から南は沖縄まで余すことなく我が町に招き「アーサチャイルドフェスタ」を盛大に開催することができた。この時の記録は百八十七ページに及ぶカラー写真集に編纂し、全国の小学校や自治体に配布した。

今では中学生や高校生になった子供達が、やがて恋人や幼子を通してこのギャラリーを訪れ、自分の確かな成長とふるさとのぬくもりを感じて

欲しい。そして、未来に語り継いでくれたらと願っている



筑後川 昇開橋

また、これに先立ち、産業の拠点となる『産業振興会館』が平成二年度に完成。徐福サイクルロードから筑後川昇開橋にアプローチ

る。

この他にも、当時、提言した町づくりのハード部門は、七つの施設整備建設を目標として設定した。その中でも、昭和十年に鉄道橋として架橋された、動く橋としては東洋一と言われる『筑後川昇開橋』を鉄道廃止を機に歩道橋として再整備する計画は、平成五年度から七年度の完成を目標に着手し、近代的土木遺産の保護と有明海、筑後川と併せた観光資源としての活用を考えている。

余談になるが、動く橋が縁で愛媛県の長浜町とも交流の絆を結ぶことができ、今年の秋には長浜で開かれる「動く橋サミット」にも参加し、交流をさらに深めたいと思っている。

する『鉄橋展望公園』も平成四年度に完成を見た。

残る施設のうち、文化体育館は平成六年度着工、七年度の完成を予定している。更に、未だ着手の目処が立たないものの、平野部では珍しいとされ大陸との交易を証明する第一級の埋蔵品

が出土した『石塚古墳公園』整備、『歴史民族資料館』の建設、そして徐福の足跡を偲び未来へと結ぶ『歴史夢公園』の完成をもって、我が町のふるさと創生事業の第一楽章が終わる。

ソフト事業も『諸富町まちづくり活性化促進基金』を設置し、人材育成、イベント実施、民間活力

の誘導を促している。中でも中国の徐福村には毎年町民の希望者を派遣し、徐福村からも徐福七十代目の子孫が来町する等交流を深めている。こうした交流の中から「龍踊り」の創作、「徐福朝市」の開設、

徐福に因んだお菓子や漬物等の新しい産品が誕生している。

現在、全国の自治体がそれぞれの個性を活かしたユニークなまちづくりを進めている中で「我が町の取り組みはこれでいいのか」とスタッフの一人として自問自答す



徐福朝市

諸富町役場

佐賀県佐賀郡諸富町

諸富津一

〇九五二(四七)二二三

今年も 燃えます



伊予三島市
青木 美津代

結、ポスター張
りから街頭での
チラシ配り、各
種団体例会に赴
いてのPRなど、

私たち秋桜塾は、昭和六十三年九月十八日、県の施策（生活文化若者塾）として伊予三島市に誕生しました。若い女性だけの塾は県下唯一。あくまでも自然体で「お酒落でさり気なく、女性の感性と視点を活かしたソフトなまちづくりを…」をモットーに、コンサート活動をメインに進めることになりました。

力いっぱい活動したイベントでした。お陰さまで伊予三島市民会館は満員、舞台も会場も熱気でムンムン。失敗も数多くありましたが、みんな忘れてしまうほど酔いしれていました。

このコンサートが起爆剤となり一カ月後、「宗次郎の野外コンサート」を共催、続いて年末には「山形由美フルートコンサート」を主催し、あつという間に一年が過ぎてしまいました。

ちようどその頃、伊予三島市では平成二年から「ゆかいなまちづくり事業」と称して、文化イベント開催事業（二十万円）を予算化することとなり、秋桜塾の活動を支援してくれることになりました。

平成二年七月二十八日、秋桜音楽祭と称し「世良公則ロックコンサート」を主催したのでした。右も左も分からない私たちが一致団

結、嬉しい悲鳴とともに「これでいいのかな…」という疑問も

湧いてきたのです。「手作りのコンサートがしたい」、贅沢なことだと思われるかもしれませんが「もつと和気あいあいとした塾生のアイデアが生かせられるような、そんなコンサートがしたい」。

誰もがKANのコンサートのあと感じたことでした。スター「KAN」、話をすることも近寄る事もできず、アツという間にこのコンサートが終わってしまったからなのです。この時ほど虚しさを感じたことはなかったように思います。

突然、知人から「水森亜土のJAZZをしませんか」という話が舞い込んできました。「漫画家の亜土ちゃんがJAZZを歌うんですか?」、失礼な事を言ってしまったが、全員乗り気になったのは言うまでもありません。そしてついに、塾生によるアイデアをいっぱい詰め込んだ手作りコンサートを開催したのです。

「水森亜土TALKアンドJAZZ」、イラスト（まんが）を即興で書き、ジャズを楽しく歌い、

トークで笑いを、そして塾生は全員タキシードを着て正装し、会場では「世界カクテル競技大会」で優勝された森さんにカクテルを作ってもらいました。出演者もお客さまも塾生も一緒に楽しんだお酒落なイベントを企画、主催することができたのです。

その後、平成四年十月「J・WALKコンサート」主催、十一月「加藤いづみTALK KNIGHT」、そして昨年は「ウインナーカンマーソリステン」を主催しました。

この四年間いろんなことにぶつかりながら、それでも自分たちがまず楽しみ、そしてその楽しさを市民の人達にも味わってもらおうという趣旨で続けてきました。

平成六年、伊予三島市は市政四十周年、開港二十五周年を迎えました。今年の夏、私たちはまたまた熱く燃えます。

次回は、新宮村の協志也さんをお願いします。



JA

婦人部活動に

参加して



嘉島などの島々も、そこに暮らす人々も知らずに終ったと思います。が、日振島、戸島の自然の美しさや人情味あふれる島の人達に接することができたことを嬉しく思っています。

宇和島市内より車で海岸線を通り、三十分程走れば私の住んでいる下波に着きます。山々のみかん畑は、春にはみかんの花の香りに包まれ、秋にはみかん、伊予柑が色づき、山一面が黄金色に輝きます。そして、取り入れが済むと、もとの静けさに戻り、お正月を迎えます。海は真珠のいかだや、鯛やハマチの養殖いけすが湾内狭しと並べられ、海の幸、山の幸に恵まれたとてもよい所です。

緒になって、老人介護の学習会などのようなふれあいの場を持つことができれば、お年寄りの気持ちも分かり、また、接する事によっていたわりの気持ちも生れてくることでしょう。親がその様な気持でいれば、必ず子供もその姿を見て考えてくれるのではないかと思います。そうすることで、家庭からさらには、地域へとふれあいの輪が広がることを願っております。「親のうしろ姿を見て子供は育つ」といわれます。子供に恥じない行動を取りたいものです。



前列左三番目 福田さん

着物パーティー
下波支部の皆さんです

「イー」で、今年で二回目になります。八十数名の方々に参加していただきました。着物といえば、ぜいたくで非活動的と思われるかもしれませんが、この日はやはり日頃の忙しさも忘れ、おしとやかな女性に変身です。

着物のむし干しにもなりますし、どれを着ようかとあれこれ取り出して、選択に頭を悩ますのも楽しい一時です。

着物姿はよいものです。華やかな中にも落ち着いた雰囲気、抹茶を点ててのテーブルパーティーです。着る機会が少なくなった今、この様な活動を通して多くの方が着物を着ていただくことを望みます。細やかな活動ではありますが、これからずっと続くことを願っています。

次回、城辺町にお住まいの関口千代子さんにお願います。

私達の活動の一つ紹介します。

毎年九月に呉服の展示会があります。売るばかりでなく、着る機会を作っては始めましたのが「着物パーティー」



宇和島市
福田 利子

私達を引き受けなかったら、宇和島に浮かぶ日振島、戸島、

農協の人達の依頼で、婦人部の役員を引き受けまして五年になります。その間には、本当に多くの方々にお世話になり、また、たくさんの人達との出会いに恵まれたおかげで、多くの事を学ぶことができました。

もし、役員を引き受けなかったら、

リレーで
ちょっと
トーク

地域を生きる

まちづくり

新しい風を

—これからの久米は—

松山市

三好 通昭

史跡と温泉の町 久米

久米地区は、松山市の東部に位置し、国道11号線や伊予鉄横河原線が通り、交通至便なところとして古くから発展してきました。数年後には、四国横断自動車道のICへのアクセス道となる松山外環状線と国道11号線の結節点となり、さらに広域交通の要所となる地域であります。

また、地区には三ヶ所の温泉が湧出し、豊富な史蹟・文化にも恵まれ、ため池や泉なども多く、昔から清水との関わりの深い地区で、浄土寺や来住庵寺跡・山田池などは公園として整備が進んでいます。

現在人口は約二万五千人で、近年宅地開発により人口が急増している地区であります。

素晴らしい風土を次代に伝えたい
薄れつつある地域社会への関心と住民相互のコミュニケーションを回復し、生きがいを感じることのできるまちづくりを進めるとともに、「ゆとり・やすらぎ・うるおい」が持てる地域社会を築いていくため、「今、私たち住民は何をすべきか？ 今、ふるさと久米の活性化に必要なものは何か？」を常に住民に問ひかけ、議論し、その結果をもとに次のような取り組みを行うことにしました。

一、「ふれあいTOWN久米」の発行

地域の情報を住民に伝え、地域への理解と関心を高めるため、平成三年十月より、久米地区情報誌「ふれあいTOWN久米」を毎月九千部発行し、すでに第二十九号となり、大きな成果を上げています。

二、久米芸能連の結成

暮らしの中に、文化が息づくよ

うな環境が必要です。そこで、久米地区を「芸能文化の里」にしようと声が上がリ、平成元年四月に「久米芸能連」を結成し、芸能大会・演芸会・チャリティー芸能祭などの発表会を開催するとともに、福祉施設の慰問等を行っています。この活動を通して、日本の歴史や風土から生まれた日本の心を知ることができた。一方、それぞれのサークルの特色を活かし合いながら、お互いを理解し合うことにより、一層の「励み」が生まれています。

三、三輪田米山展の開催

郷土の偉

大な書家

「三輪田米

山」を顕彰

し、地域文

化の向上に

資する」と

もに、作品

の良好な保護保存を勧奨するため、作品所有者の状況調査を行い、作品を集めての書展を開催し、県内外から千人を越える参観者が訪れ



三好 通昭氏

まちづくりの象徴として大いに活用しています。

五、東道後温泉郷春まつりの開催

毎年五月三日に開催

自分の生まれたふるさとを未来に残し、子供や孫たちに伝え、さらに新しく転入してきた方々にも、久米地区の歴史や文化・民族などを知っていただくこと、郷土誌を刊行しました。

また、すべての住民がふるさとを愛し、誇りを持ってもらえらばと、地元の方による作詞・作曲の「新久米音頭」ができあがりました。今後、まちづくりの象徴として大いに活用しています。

五、東道後温泉郷春まつりの開催

される「東道後温泉郷春まつり」を地域活性化の要の催し物として、商工会と共催し、住民が一体となって取り組んでいます。親しま



七、久米まちづくり推進委員会の

結成

日々の暮らしが安全・快適・便利で、そして健康的に営めるように生活環境を整備し、住民の繁栄とあわせづくりを進めていくため、「久米まちづくり推進委員会」を結成し、様々な住民運動を進めています。

これは、町内会・土地改良区・商工会等、地区内のすべての団体を束ねた組織で、それぞれに要求や課題を出し合い、みんなで考え、みんなでまとめて行動し、課題解決を行うことを基本方針としており、平成五年七月の総会で次の計画を承認しました。

事業計画

- ア．東部副都心構想の推進
- イ．久米商店街の近代化と用途地域の検討に伴う特別委員会の設置と先進地視察
- ウ．交通網の整備と道路計画、交差点の改良
- エ．芸能文化の里としての文化施設建設運動の推進

活動内容

H 5・7・23

山口県阿知須町の施設、及びシステムを視察調査

H 5・8・19

久米商店街環境整備特別委員会で答申内容の協議と臨時総会開催の決議

H 5・8・30

臨時総会の開催

H 5・11・17

松山市に、「久米生活文化センター構想」の陳情

H 5・12・22

「久米まちづくり有限会社」設立総会の開催

H 5・12・27

「久米まちづくり有限会社」を登記

H 6・2・2

中小企業事業団商店街シニアアドバイザー松本進氏に「第3セクター方式による久米生活文化センター構想」についての指導

H 5・2・8～9

中小企業大学広島校で「これからの街づくりについて」研修に参加



今後とも、久米地区の発展を願い、「生きがいのあるまち」づくりのため、前向きに取り組む、常に問題意識と希望を持って、久米のふるさとづくりに邁進していきたいと思えます。

本物を求めて…

大三島町

越智幸博・万里子

◆はじめに

昨年、十二月二十八日（日本テレビ四十周年記念事業）に全国放映された「鶴姫伝奇」をご覧になったでしょうか。その余韻を胸に、大山祇神社と美術館で有名な国宝とロマンの島、大三島町に、文化活動を主にコミュニティ活動に取り組んでおられる越智幸博・万里子ご夫妻を訪ねた。

まちづくりのベースとなる「人」が、地域の中でどのような活動や生き方をすることが必要とされているのか、今回から新しく設けた「地域を生きる」というコーナーで、「人」にスポットをあて、地域での生き方のベースを探ることとしました。

◆帰郷：

越智幸博さんは、大三島町野々江地区出身で、今治や松山で生活の後、大阪で自動車部品会社を経営。

四十歳で老後の計画を立て、昭和六十一年暮れに五十二歳で帰町された。

その理由は、もともと実家に弘法大師のお堂があり、地区の方々にお世話をして頂いていたが、その恩返しをしたいという気持ちと、何かふるさとのために自分のできることをしたいという思いから、帰郷する決意をされたそう。

また、大阪で知り合い、結婚された奥様は、鹿児島出身で、太陽のように明るく、そして、大地に降り注ぐ陽の光のように温かな天真爛漫で気骨のある薩摩おごじょという印象を受けた。

◆ふれあいの中で：

越智さんは、帰郷して現在の野々江地区にある岡山小学校（昭和六十年に閉校）

で、グラウンドにはゴミが散らかり、不用になった電柱が放置されているのを見て、とても寂しい思いがしたそうである。

また、この学校には、個人的な思い入れがあるそうで「明治八年の創設時には、先祖が地区の総代をしており、自分も昭和十八年から三年間、通学したということもあり、懐かしさの中にも鮮明な思い出が残っている。このような思いもあって、このまま放つては置けないと、地区の中でお互いの思いや考え方を語り合うことから始めた。その折、教育委員会では花づくり教室が展開されていたため、レンガ・花等の資材は教育委員会に頂き、作業はみんな手作りで行った。

新しくできた花壇を見ていると、自分たちの存在を感じることができると、今ではゴミを捨てる人もいなくなった。こ

のような過程の中で、お互いを認め合うことができたことが、成功の秘訣だ」と話された。

また、「今年の町文化祭では、一度やってみたかった屋台村をすることができた。役場の車庫内に、屋台村の雰囲気ができるよう、自分たちの手でのれんや屋根のひさしなど、飾り付けには非常に苦心をした。お蔭で、例年になく盛況となり、このイベントを支えたみんなが、心地良い汗と満足感を得ることができた」と、とても嬉しそうに話された。

◆仲間づくり：

さらに、越智さんは「何事にもなるべくお金を掛けず、本物に近い物を作ることが好き。そして、オリジナルな物を作りたい」と言われるだけあって、趣味も多彩で焼き物の腕は素人の域を超えるほど。奥様に言わせると「なんにでも凝り性で困ります」とニガワライ。現在では「教育委員会の巽にはまった感じですよ」と言いながらも、笑顔で地域おこしに奔走される越智さんご夫妻だが「自分一人



では何もできない。やはり、仲間づくりが大切。ただ、仲間を増やすということは、ヒューマンリレーションズ（人間関係）がどうあるべきかを考えなくてはならないということでもある。自分の主観で、他人に特別なレッテルを張ったり、その人のマイナス部分を強調したりしては、本当の友はできない。相手のプラスな部分を素直な気持ちで褒めることが「一番大切」と、奥様も言われる。

◆何事もプラス指向で：

一般的に、田舎は封建的で個性が生かされにくいといわれる。「あの人は昔ね…」というように、十年も前の出来事が、いつまでもそ

の人のイメージなのである。

このような環境の中では、とても個性豊かな人が育つとは考えられないし、未来に夢を馳せることなどできないのではないだろうか。「高齢化・過疎化が進む中、将来を諦めたり、今を嘆いてばかりでは決して問題は解決しない。今こそ、プラス指向で物事を考えることができる人材が必要」と越智さんは言われる。

◆夢を抱いて：今！

すっかり奥様のペースで取材が進む中、最後に、ご夫妻の夢について語って頂いた。

越智さんは「様々な面において、昔の良さを取り戻したい」と言われる。「昔は子供の躰についても、地域の中で、気が付いた人が注意をするというような、地域全体で育てるという風習があった。また、助け合いの心や思いやりなども、同様に、自然と身につけていたように思う。古き良き慣習というか、本来、田舎にあった素晴らしい人間関係を復活させることで、まちのため・人のためという思いを、

みんなが持てるのではないかと熱っぽく話され、その思いの深さを強く感じた。

奥様も「帰町された当時、よくこんな所に帰ってきたねと言われ、なぜそんなことを言うのか、非常にショックを受けた。自分のふるさとに、どうして誇りが持てないのか。親がこのような意識を持っている以上、子供も残るはずがないし、帰ってきたいとは思わないでしょう。ふるさとの良さを教えてあげるのは、親や地域の責任でもあります。義務じゃないかと思う」。

さらに、越智さんは「たとえば、形だけの町並み景観だけを取り戻してもだめだし、コミュニティの面においても、“心の持ちよう”を昔から学ばねば。今後は、生涯現役を胸に頑張りたい」とやる気マンマン。負けまいと、奥様も「ヨガ教室等、忙しい日々を送りながらも毎日が楽しい。これから、プラス指向で何事にも取り組みたい」と話された笑顔が、とても魅力的だった。

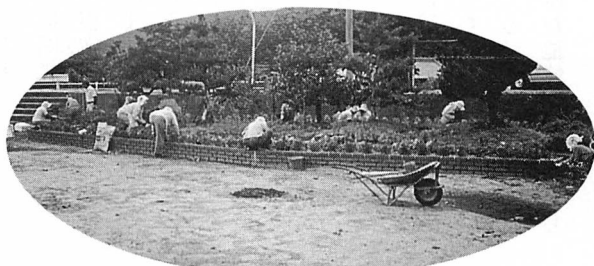
◆取材を終えて：

まちづくりの切り口として、地域資源の発掘や若者定住を掲げられることの多い中、「地域の良さをどれだけ若者に語っているか」と

いったコミュニティのあり方を再考することはとても大切なことだと思った。

もう一度、お互いの足元から、人を・まちを見つめ直すべきではないか、「褒められていやな気がする人はいないのだから」というご夫妻の笑顔に触れることで、その思いを強くした。

最後に、取材に協力して頂いた越智さんご夫妻、教育委員会の方々に、心よりお礼を申し上げます。（研究員 尾崎 弘典）



花壇の管理もみんなです



愛媛県共済農協連より(前)愛媛県
まちづくり総合センターに出向し
て、あつという間に二年が過ぎま
した。平成四年の三月に、突然ま
ちづくり総合センターへの出向を
命じられたときには、一体全体何
をするところなのか、就職して以
来初めて「共済」以外の仕事をす
る訳ですから、期待と不安で一杯
でした。

そして、まちづくり総合センタ

ーへ来て、県内各地で行政はもと
より一般住民の方々が中心となっ
て、多種多様なまちづくりが展開
されていることを知り、その情熱
や発想に驚かされました。その手
法も多岐に渡り、ひとつのイベン
トにしても、様々な想いが込めら
れていることを教えられました。

また、愛媛県内のこと、さらには
知っているつもりであった自分の
住んでいる地域のことでさえ、
知らないことが多々あることに初
めて気がきました。

※二年間の思い出

まちづくりセンターの二年間で
は、各種の事業に参画することで、
県内外の様々なまちづくりにかか
わる多くの方々との出会いや語ら
いの中で、その折々に素晴らしい
感動を与えていただきました。

そして、「森を出て森を見よ」
という言葉があります、これか
ら組織の一員として復帰し、業務
に従事する私にとっては貴重な経
験となることでしょう。

また、物事を客観的に、また、
問題の所在を適確にとらえ、適切
な処理を目指す上でも、大きな糧
となり支えとなるであろうと思ひ
ます。

これらの中で特に心に残るのは、
ふるさとコンサルティング事業で
す。この事業では、平成おもご塾
を担当させていただき、毎月の定
例会、年三回のアドバイザー派遣
で面河村を訪問しましたが、親し
く塾生の方々と交流させていただ
くとともに、ふるさとを愛し、ど
うすれば面河村が良くなるかとい
うことについて真剣に考え、いろ
いろな活動に活発に取り組む姿に
感動しました。面河村が私の第二
の故郷になったように思います。

そして、アドバイザーとして来
ていただいた、高知県大川村の朝
倉慧氏のあるさとを愛する熱い想
いや中島町の大崎巖氏の卓抜した
理論に触れることができ、大変勉
強になりました。

こういった塾の活動がやがて大
きな成果となって、面河村がさら
にすばらしい地域となることを

願ってやみません。

また、県外研修で全国のまちづ
くりの先進地といわれるところへ
行きましたが、やはりそこには、
それぞれにまちづくりのリーダー
といわれる人がおり、地域の資源
を活かした素晴らしいまちづくり
が展開されていました。その中で
も、長野県南木曽町の妻籠宿と滋
賀県高月町の雨森地区における住
民が主体となったまちづくり活動
は、私自身にとって驚き以上の強
いインパクトとなって今でも強く
印象に残っています。

そのほか、機関紙「舞たうん」
の編集、草の根文化講演会の開催
県内・全国のまちづくり調査など
数々の事業のそれぞれに、忘れら
れない思い出や、出会いがありま
した。

※まちづくりについての私見

これらの経験から私自身が感じ
たことは、まちづくりにはいろい
ろな手法があるけれども、結局は
自分たちの住む地域を、自分たち

の手で良くしたいと願う地域住民自身の活動が一番重要であり、そういった住民の意見を受け入れ、行・住一体の活動が進められているまちが全国でも先進地といわれるまちではなかったかと感じました。

さらに、行政では受動的に住民の自発的活動を期待するだけでなく、様々な情報や活動の場を積極的に住民に提供するという重要な役割を担っているのではないかも感じました。

そして、例えば適切ではないかも知れませんが、まちづくりは、「アルコール」ではないかと思うようになりました。人間が生きていくためには水は決して欠くことのできないものですが、「アルコール」は無くてもいいものです。

しかし、生活を潤し、楽しくするためには、必要なものではないでしょうか。「自分たちの住む地域を良くしよう」、「子供たちが残るまちにしよう」と頑張り、その成果にさらに酔い、ますます元気にまちづくりに取り組んでいく

……、そんな状態がまちづくりが進む好環境ではないかと思えます。

ただ、或るとき「何もしないというまちづくりは、方法として考えられませんか」という質問を受けたことがあります。このときは考えさせられました。

これは、自然保護の観点から出た質問だと思われませんが、人間が生活していく上では、ある程度自然に手を加えることは必要なことだと私自身考えていますし、経済的基盤があつてこそまちづくりができるのではないかとも思われ、結論は出ませんでした。非常に印象に残りましたので紹介してきたいと思います。

◆最後に

この二年間でまちづくりについて何かをつかんで、自分の物にして帰りたいと考えましたが、残念ながらこれといった成果は残せませんでした。

しかしながら、今まで気付かなかった県内各地のまちづくりの動

きに興味を持ち、新聞やテレビといった報道を気に懸けたことは、組織の一員であると同時に、一地域住民である私にとっても、より魅力的な人となるためのワンステップになったと思います。

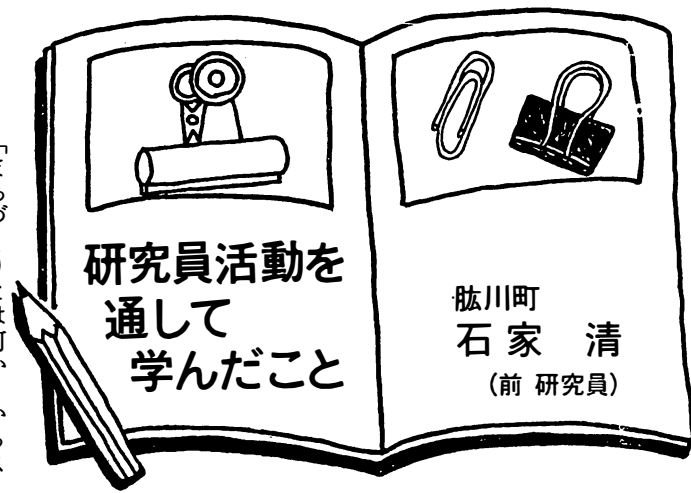
また、各地のイベントに家族連れで出かけたりましたが、これも、まちづくり総合センターにいたからこそだと思っています。

今後、まちづくり総合センターでの経験を、共済事業に必ずしも全面的に役立てることはできないかもしれませんが、農協運動にあつても、農協組合員のみでなく広く地域住民を対象とした運動が求められているときであり、これからの組織活動においても大きく役立っていくのではないかと思います。本当に自分自身にとって勉強になった二年間でした。

最後に、貴重な経験をさせていただき、楽しく過ごさせていだいた、まちづくり総合センターの渡邊所長をはじめ、松森主任研究員、諸先輩の研究員の方々、えひめ地域づくり研究会議の方々等こ

こに來なければ出会えなかった数多くの方々に、誌面を借りてお礼を申し上げ筆を置きたいと思ひます。





研究員活動を通して学んだこと

脇川町 石家 清
(前 研究員)

「まちづくりとは何か」からスタートしたまちづくり総合センターでの一年間は、本当に楽しく、そして瞬く間の出来事のようにでした。

それまでの私は、自分の担当業務のことしか視野になく、そのことがまちづくりであるというくらい意識でしかなかった状態であり、まち全体を見渡しての総合的なまちづくりの意味を理解するには至っていませんでした。

私にとってはまたとない機会に

恵まれ、まちづくり総合センター研究員として、様々な経験をする事ができました。

その研究員活動のまとめとして、センターの組織の中で学んだこと、自分づくりについて学んだこと、そして、いわゆるまちづくりについて学んだことの三つについて、私なりの報告をさせていただきますと思います。

❖まちづくり総合センターへ来てみて：

初めのうちは、新しい職場とのスタンスの違いと、町から派遣されているという緊張感ばかりを感じていました。

そのような中、センター業務を進めていくうちに様々なことを学ばせていただきました。

一つは、事業などの目的と手段を明確にしなければならないという事です。「何のためにこれを行うのか」「これをすればどうなるのか」ということを、計画の段階ではっきりさせる必要があるとともに、その後の評価も忘れてはならないということを学びました。

二つには、社会情勢や各地域の動きなどに常に敏感でなければならないということでした。そのことにより、「今、どのような動きがあるか」「その背景に何があるのか」ということを把握し、「今、何が大切なのか」「何が必要とされているのか」という視点で、適切な方策を打ち出していくことが重要であり、今後は自分が常に問題意識を持たなければならないと感じました。

三つめには、自分のまちを外から見つめることの大切さです。町の取り組みが、外にどのように見えたり、聞こえたりするのかという事が、いつも気に掛かりました。それまでと違う立場で、自身自身の町や仕事への見方・考え方を、問い直すことが大切ではないかと思っています。

❖自分づくり

「まちを変えるためには、自分が変わらなければならぬ」「自分が輝けばまちも輝く」と、多くのまちづくりの実践者は言われています。自分から周りの人たちに呼び

かけ、輪を広げながらまちづくり活動を進めていく上では、人を説得するという大仕事が待ち受けており、自分自身に人を納得させるだけの實力がなければならぬといわれます。ここでは、そのための自分づくりの面に触れさせていただきます。

センターへ来て一ヵ月くらい経った頃、ある方に「あなたは、これまで何をしましたか」「今後、何をテーマに勉強しますか」と聞かれたのですが、私はろくな受け答えもできませんでした。その方は「君には、『読む』『書く』『しゃべる』『実行』をするということだ」と言われました。思えば、どれ一つ取ってみても得意なものはありません。

また、研修の受け方について、福岡県のある方はこう言われました。「他所で話を聞くにしても、相手の批判をする力を持ち、そうしてから取り入れてこいと職員に言っている」。何とも過激だと思いましたが、その部下の職員であった方も、「ここのいけないと

思う点を言うてください」と堂々と言われました。その自身を感じての反面、地域づくりに対する姿勢の真剣さ、厳しさを伺い知ることができました。

そのうえ同氏は、「都市と農村の交流は対等な立場で行うことが重要。そのためには、農村側も実力を付ける必要があり、誰とでもどんな話題にでも対応していけるものを、身に付けなくてはいい」と言われました。これも忘れない言葉の一つです。

✧これからのまちづくり

まちづくり総合センターでは、まちづくりに関連する情報などに毎日触れながら、各地の話題や取り組みの様子を知ることができ、情報を収集するということ、日頃からその意識を持つておくということの大切さを感じることができたとあります。

しかし、何分にも少々の努力ではおいつけず、まちづくりの体系的な学習ができていないのが現状ですが、今までは違う何かが残ったと確信しております。

ある実践者の話の中に、「谷の底ばかりでものを考えていてはいけない。山の頂上に立って眺めてみると別のものが見える」とあり、それは視点を変える、広く見てデザインすることが大切という意味深い言葉でした。

また、今積極的に取り組まれている「地域の個性を活かす」ということがあります。地域の活力を目指す糸口として欠かせない視点であると思います。それぞれの地域に、それぞれの歴史、風土、文化が根付いていることは言うまでもなく、このような資源を生かして、まちに住む誇りや喜びが持てるように、人の心をつないでいくことは必然的な動きだと思えます。

このような、地域の生き残りをかけた取り組みなども、やはり最後にはそこに住む「人」に行き着くのではないかと思います。「心の豊かさ、生活の豊かさ」といわれますが、個人がそこでどのような生き方をするのか、できるのか、ということになるのではないで

しょうか。

この点に関連して、スイスの過疎地開発のコンセプトにあった「開発より今の生活の質を高めること、福祉の原点（人が自然の中で安らいで元気になっていくこと）に帰ること」などには、人間重視、生活重視という面で強く惹かれるものがありました。

これからのまちづくりには「ふるさと」「自然」「環境」が、大変重要な要素であろうし、何より幅広い意味での「生活」の質を高めていくことが求められると思います。

例えばそのような、地域はこうあるべきだという理念を確立することが先決であり、次いでその実現に向けての様々な方法論を行き交わしていくことが、まちづくりを進める過程では大切ではないかと考えます。

現在の社会は様々な問題を抱え、私たちの世代への課題も多く、その渦中で生きながら、自らの力で解決に向けて頑張っていかなければなりません。

などと、身構えてみても、現実

にはあれこれ悩むばかりでしょう。

そうならないためにも、これまでに得られた人のネットワークを大切にし、交流することにより学び合いながら、さらに人の輪を広げていくことも必要だと思います。

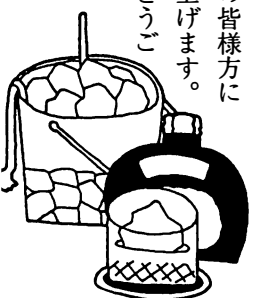
✧おわりに

終えてみれば、時の経つのが本当に早かったこの一年間。特に自分分は変わったぞとは言えることはありませんが、何かいろいろなものの方・考え方について学んだような気がしています。

まちづくり総合センターは、いつも温かい雰囲気、それでいて心地よい刺激と、ピリッとした緊張感を味わえる職場でした。

センター活動を通して、様々な出会いの中で何かとご指導をいただいた数多くの皆様方、厚くお礼申し上げます。

誠にありがとうございました。



地域づくり研究サロン まちを素敵に

——私の求めるまちづくり——

ボランティア、文化イベント等々、様々な分野で地域活動にかかわっておられる、県内各地の十九名の方にお集りいただきました。

そして、愛媛大学教育学部教授の讃岐幸治先生をコーディネーターとして、「どうすれば、まちが素敵になるのか」を探ろうと、参加者の活動事例や地域への思いなど活発な意見が交わされました。その概要について、簡単に紹介します。

＊サロン・トークング

当センターでは、三月五日(土)に県女性総合センターにおいて、えひめ女性財団と共催により、『男女共同参画の地域づくりセミナー』を開催しました。

今回は、テーマを「まちを素敵にー私の求めるまちづくりー」と題し、女性の視点を生かしたまちづくりについて語り合っていたいただきました。

このサロンには、花づくりやゴミ対策などの環境美化運動、福祉

た動きがあると、頭を抑える動きがある」という指摘や、「もっと女性の意見や参加できる環境をつくってほしい」などという意見が出された。

このように、活動を通しての様々な意見が交わされたが、その中から、実際の活動の話題として、「花づくり」では、「どのような活動の輪を広げたらよいか」という問い掛けに対し、「花づくりにロマン、話題性を持たせて進めてはどうか」など、お互いの活動に對してのアドバイスもあった。

そして、地域づくりの活動に對する考え方として、「友達同士の話題の中から少しずつ実行していけばいい」「自分がしたいことを情熱を持って、最初にやってみることで何物にも代え難い感動を味わうことができる」など、肩ひじ張らず楽しく進めることが大切との意見もあった。

そのほか、「障害者やお年寄りが気軽に出席けられるまちにしてほしい」「ふるさとを子どもに残し、伝えたい」「川で子どもが泳

げるまちづくりがしたい」など、日頃の生活に密着した女性ならではの意見、話題なども出された。

サロンを通して、各地で頑張っている方々の率直な意見交換が行われたことは、今後それぞれの地域で、男女共同参画型のまちづくり活動を進める上で、大変有意義なことになるのではないだろうか。

自分の地域に熱い思いを寄せて取り組んでいる姿は、まさに輝いて見えるだろう。そして、最後にある方が言った「素敵な出会いのある心地よいまちづくりがしたい」という言葉も印象的だった。

(前研究員 石家 清)



平成 6 年度事業計画

財団法人愛媛県まちづくり総合センター

財団法人愛媛県まちづくり総合センターは、県内各地で進められている地域づくり活動の支援機関として、潤いと活力に満ちた新しい愛媛のくにづくりと21世紀の愛媛を創造していく基盤づくりのため、県内の各地域が進めている歴史文化など地域固有の資源に根ざした地域づくり活動を支援することとし、平成6年度の事業計画を次のとおり定めました。

平成 6 年度事業計画の概要

- 機関誌『舞たうん』の編集・発行
まちづくり活動の情報発信と地域づくり活動者のネットワーキング誌として、継続して発行する。
なお、今年度から発行回数を年4回とするが、誌面構成に工夫を凝らし、一層の内容充実に努める。
【4月、7月、10月、1月発行】
- 情報収集用刊行物の整備
まちづくり関連の各種刊行物と、「まちづくりビデオ」の整備を進め、引き続きまちづくり情報の蓄積を図る。
- 主要事業成果の刊行物化と活用
センターが実施する各種事業の事業成果を刊行物化し、まちづくり情報として提供する。
- 『まちづくり調査研究事業』の実施
平成5年度に実施した「全国まちづくり調査」の分析・集計・整理作業を進め、迅速かつ広範なまちづくり情報の提供に努める。
- 新鮮かつタイムリーな情報の収集・提供
県内各地からのまちづくり情報の個別需要に対し、新鮮かつタイムリーな情報を提供する。
- パソコン通信ネットワークの実用実験
パソコン通信をまちづくりに活かすための実用実験を継続して実施する。
- イベント情報誌『えひめイベントBOX』の編集・発行
平成6年度中に県内で開催される、あらゆるジャンルのイベントを保存活用タイプの情報誌にまとめ発行する。 【4月発行】
- 『地域づくり研究サロン』の開設
まちづくりに関する様々な課題や時代に即したテーマ等について、専門家の意見を交えた研究サロンを開設する。
- 『まちづくり草の根文化講演会』の開催
地域住民を対象に、まちづくりの先駆的实践者を招いての講演会を開催する。
- 『地域づくり先進地交流研修』の実施
次代を担う地域在住の若者を対象に、全国レベルの先導的まちづくり事例を研修するための先進地交流研修を企画・実施（10月）する。
- 県外の実験的活動者との交流事業
県外の地域づくり活動者との交流を通して、新鮮な情報の収集に努める。
- 『まちづくり研究アシスト事業』の実施
まちづくり研究グループ等が実施する学習・研究活動並びに広域的なまちづくりイベント等の開催を支援し、ひとが育つ環境づくりを進める。

道後の新名所 “観光カラクリモニュメント”

松山市

日本最古の温泉として名高い、道後温泉。その玄関口である放生園に、この度「観光カラクリモニュメント」が設置されました。

このモニュメントは、高さ七m（演出時九m）縦横三m×三mで、土台部分に観光案内図を備え、毎正時になると太鼓の音が鳴りわたり、優雅なBGMの中、カラクリの演出が始まります。

モニュメントから次々と現れ、皆様をお出迎えるのは、おなじみの小説「坊っちゃん」のキャラクター達です。時計が反転してマドンナが、正面玄関から坊っちゃんときよが、左右四カ所からは赤シャツ・うらなり・山嵐達が現れ、見物客の目を楽しませます。

坊っちゃん一党が勢揃いすると、小首をかしげたマドンナが「観光松山」の説明を行い、楽しい旅の始まりを予感させ、カラクリの演出が終わります。

どうか松山にお越しの際は、道後の新名所「観光カラクリモニュメント」を、是非ご覧下さい。



観光名物センター

“きくらげ館” 完成

伊方町

伊方町観光物産センター「きらら館」が完成し、五月のゴールデンウィーク前のオープンを目指しています。

この「きらら館」は、地元特産品の展示販売を行うほか、民俗資料の展示、観光客の方に寛いでいただく休憩コーナー、屋上には展望デッキがあり、伊予灘、宇和海が一望できるほか、原子力発電所やメロディーライン、半島特有のリアス式海岸などの自然美を満喫することが出来ます。

特に一階の展示コーナーには、

センターの情報提供機能をより一層充実し、迅速かつ広範なまちづくり情報の提供に努めることを目的に実施したものです。

三月末現在、調査を依頼した自

国内でも珍しい不思議な“ふれあい水槽”を設置して、魚と直接ふれあい、餌を与えることが出来る体験コーナーもあります。

場所は、佐田岬半島を縦断する国道197号バイパス沿いの伊方ビクターズハウス西側です。

また、十月頃には、この伊方ビクターズハウスときらら館三階とを結ぶ連絡通路も設置する計画です。

年末年始を除き毎日開館を予定しています。ご家族やご友人お誘い合せの上、ご来館ください。

※問い合わせ先 伊方町役場産業課 電話（〇八九四）三八一〇二二





本谷温泉館 まもなくオープン

東予市

道後温泉、鈍川温泉と共に伊予の三湯に数えられ、古くは三十四代舒明天皇や三十七代斉明天皇が御入湯されたといわれる本谷温泉が、装いも新たにオープンすることになりました。

大明神川の上流の山里に佇む温泉館は、基本コンセプトを『市民の憩いの場としての、「新しい田舎」の創造』とした「温泉開発及び自然公園整備事業」の中核施設であり、豊かな自然と農村風景を生かした佇まいとなっています。

公園の完成は平成六年度になりますが、大浴場は岩風呂、木肌風呂の二つがあり、その中にサウナ風呂を併設しています。また、身体障害者用の設備を

「全国まちづくり調査」を実施

財愛媛県まちづくり
総合センター

備えた家族風呂もあり、一階には三世代交流室、二階には老人憩いの部屋や研修室等があります。

温泉を楽しむながら、のんびり過ごすもよし、頭をひねるもよし、気分をリフレッシュするも良しの施設となっています。



治体の半数に当たる約千六百の区市町村から、調査表と共に貴重なまちづくり資料（振興計画、要覧等）の提供をいただいております。平成六年度には、皆様のまちづくり活動のお役に立ちますよう、提供いただいた資料の分析と整理加工を行い、多様な情報提供に努めることとしております。

瀬戸内海を一望する

波間田地区公園

生名村

波間田地区公園は、「自然いきいき、人もいきいき、生名村」をキャッチフレーズにスポーツ合宿村を目指す当村の中核施設として、四月にオープンします。

「立石山頂展望台」「野外ステージ」「芝生広場」「果樹・花木広場」等、架橋美・多島美の美しい自然景観を生かした自然公園として、村内外の人々に広く利用して頂けるものと期待しています。

潮風を感じながら遊歩道を歩くと、時の流れを忘れてしまうほど、自然の美しさに心魅かれることでしょう。

ふるさとの雰囲気大切に、まちづくりを進める生名島へ、ぜひ一度ご来島ください。

（財）愛媛県まちづくり総合センター

人 事 消 息

■平成5年度 センター職員（◆印は新しいスタッフです）



◆主任研究員

中村 博之
(愛媛県庁)

◆研究員

松川 伸二
(野村町役場)

◆研究員

藤田 良
(宇和島市役所)

◆研究員

竹松 毅
(愛媛県信連)

(前列左から)	事務員	川原 千明	所 長	渡邊 智	事務員	中路由加理
(後列左から)	主任研究員	中村 博之	研究員	松川 伸二	研究員	藤田 良
	研究員	竹松 毅	研究員	尾崎 弘典		

●4月1日付けで、主任研究員・研究員として勤務された4名の活動の拠点が変わりました。これからもよろしくお願いいたします。



石家 清 (肱川町)	藤原 元久 (大三島町)	松岡 正範 (共済連)	松森 陽太郎 (愛媛県庁)
---------------	-----------------	----------------	------------------

野に咲く花も、やさしい日差しに誘われ、みんなの心にも春を告げる季節となりました。さて、「舞たうん」は今号から年四回の発行とさせていただきます。それに併せ、内容的には新コーナーを設けるなど、皆様に愛読していただけるよう、一層の充実を図っていきたいと思っています。

なお、「地域づくりのベースを求めて」は、誌面の都合により、今回は休載をさせて頂きます。

内容についてのご意見や活動内容についての記事など、お気軽にお寄せください。

「舞たうん」編集係

二人のMS・(中路・川原)まで
〒790 松山市三番町八丁目
二三四番地

愛媛県生活保健ビル三階

（財）愛媛県まちづくり

総合センター

TEL 0899(32)7750

FAX 0899(32)7760

発行/平成六年四月一日

（財）愛媛県まちづくり

総合センター

えひめ地域づくり研究会議